「口約束の本能寺」 by びゃっきー

明智光秀は客殿ではなく、その主殿にある織田信長の私室の一つに通された。そこには夕餉の膳が光秀の分と信長の分とが向かい合わせに用意されていた。
信長と誰かが、私室で食事を共にするなど、全くと言って有り得なかった。それは光秀と言えども例外ではなかった。
私室に通されるなどよほどのことだ。にもかかわらず、光秀は特に緊張してはいなかった。いつもの通り、ぼんやりと信長が来るのを待ちぼうけていた。ぼんやりと、とは言っても、それは人から見るとそう見えるらしいという話で、光秀自身はぼんやりとしているつもりはない。いつも何か考えている。戦時なら戦略について考えていることもあるし、嫁いでいった娘のことを考えていることもあれば、今日のように目の前の膳に並べられている食事のつくり方なんかを推測していることもある。
「そのとぼけた表情をそのままに受け取って、痛い目に会った奴は数知れないだろう」
などと柴田勝家などに言われたこともあるが、彼としては困ってしまう。どうも世間では「最初にとぼけた印象を与えておき、徐々に鋭く切り込む、いやらしいやり方」それが光秀の外交手段だと思われているらしかった。
もちろん刃を合わせる敵と話し合いを持たなければならない時などは、それなりの外交用の仮面をつけていたと言える。しかしそれはどの武将もそうだろうと彼は思う。それでも彼ばかりが計算高いように言われてしまう。若い頃は人のそうした噂が気にならなくもなかったが、どうしていいやらさっぱりわからなかった。曰く「ぼんやり」と考えごとを繰り返し、そして今日までそのままだ。
そんな彼に対して信長は「ぼんやりしている」などと言ったことはなかった。信長は裏表がなく、気性のままに行動する――ように人には思われていたが、実際は考えた末の行動だと光秀は確信していた。実際、裏で精緻に計算され尽くした戦略、調略によって、領土を着々と広げ、天下統一まであと一歩のところまで漕ぎ着けていた。
つまり光秀は一見相反している信長に、自分と似たところがあると感じていたのだ。
「光秀、待たせたな」
部屋のふすまが開いて、その向こうから信長が姿を現した。齢五十を前にしているとは思えない引き締まった体、強い意志を感じさせる光が宿るその瞳。天下人の姿というものを絵に描いたなら、この城主と寸分違わぬ絵が完成するに違いない、そう思わせる風格がある。若い時分には誹りを受けていた、その思うにまかせた振る舞いも、今となってはむしろ堂々とした印象を与えるほどのものになっている。
「いえ、それほどまでには」
光秀は深深と頭を下げた。一応恭しくしているつもりはあるのだが、どうも緊張感がないため、ちぐはぐな動きになる。そんなところも「とぼけた」などという評価に結びつくのだろう。
「膳を見せつけられて、おあずけを食らったのでは、腹の虫も鳴いておるであろう。そこへ掛けて、まあ一杯やってくれ」
信長は急ぎ自分の膳の前に腰を下ろすと、向かい合わせの膳につくように光秀にうながした。

「はい」
　光秀は柔らかく、それでもいつもよりは短めに答えた。
「ま、一献やってくれ」
　信長は自分の膳に据えられている銚子を手に取ると、光秀に向けて差し出した。
「かたじけのうございます」
　光秀は盃を差し出した。
　光秀の盃がいっぱいになったところで、信長はぴたりとその手を止めた。その水面は綺麗に器の淵と水平に収まった。光秀はそれをゆっくりと、それでも一息に飲み干した。信長は満足そうにそれを眺めた。そしてまた銚子を差し出す。
「ほう、いけるではないか」
　信長は意外そうに言った。光秀は普段ほとんど酒を飲まないからだ。一部の人間からは下戸だと思われているぐらいだ。
「もう一献やれ。それとも老齢にはきついか」
「いえ、ありがたく頂戴つかまつります」
　そんなやり取りを三度ほど繰り返したあと、今度は光秀が自分の膳にある銚子を手にとり、信長に差し出した。
「すまんな」
　信長は伏せられた盃を手のひらで覆うように鷲掴みにし、くるりと持ち上げると光秀に差し出した。光秀はゆっくりとそれでいて速やかに酒を注いだ。そしていまにもあふれるすんでのところで手を止める。その水面は緩やかに弧を描いている。少しでも均衡を崩せば、今にもこぼれるに違いない。長年生きてきて身につけた芸当だ。酒を注ぐ相手にはつい挑戦的にやってしまう。
　信長は盃を目線の高さまで持ち上げると、目を細めてそれを眺めた。そしてにやりと笑うと目にも止まらぬ速さで口元へ持っていき、喉の奥へと一気に流し込んだ。まるで器の中身を胃袋へと放り投げたかのようだった。
「おみごと」
　さすがは信長、光秀は少し嬉しくなって、そして再び差し出された盃に今度は八分目ぐらいまで注いだ。

　一通り酒が進んだところで、信長はようやく話を切り出した。
「このような部屋に通されて、さぞ不信に思っているであろうな。ひょっとすると毒でも盛られるのではないかと」
　信長はにやりと意地の悪い笑みをこぼした。
「その心配は無用です」
「ほう。なぜだ？」
「疑いをもって手打ちにされても、毒を盛られて死んでも、死ぬことに変わりはありません。殿が私の命を取るということであれば、それはいつでも容易いことです。そのような心配はするだけ無駄というものです」
　何食わぬ顔で光秀は言ってのけた。
「はっはっはっは。さすがは光秀。いけしゃあしゃあとよう言いおるわ」

　信長は機嫌よく笑うと
「のう光秀。とうとう天下統一まであと一歩というところまでこぎつけた。猿の奴が中国の毛利を墜とせば、もう決まったようなものだ」
　膳の物に手をつけながら、そう言った。
「その通りでございます。もう時間の問題でしょう」
「ただ、毛利もなかなかしぶとい。さすがに簡単には中国を明け渡してくれんようだ。猿だけではちと荷が過ぎる」
　信長に猿と呼ばれる羽柴秀吉は、現在中国の毛利を攻略中だ。後日、光秀や信長の三男である神部信孝も援軍として中国へ向かう。
「いえ、筑前殿は優秀ですから。私どもが行かなくても、必ずや中国を手中に収めて戻ってくるでしょう」
「光秀から見ても、猿は優秀か？」
「優秀です。あれほど才のある人間も珍しい。殿も猿などと呼ぶのはそろそろ少し控え目になさった方がよろしいですよ。他の者に対して示しがつきません」
「わしにとっては猿は猿だな。あやつが百姓とほとんど変わらぬころからそう呼んでおったのだからな。いまさら呼び名を変えられはせぬわ。採りあげたわしが言うのもなんだが、本当にあやつは出世したもんだな。一介の百姓がこれほどの大名になるとは」
「筑前殿は特別です。彼の手腕ももちろんですが、殿が出自をお気になさらないことも、運に運を重ねてここまでになったのです。筑前殿を除けば万に一つもこのようなことにはならないでしょう」
　光秀の話を聞きながら、信長は食事の手を休めることなく、魚の骨を歯の間から抜き取ったりしていた。
「どうした、光秀。そなたも食え。食が細るほど、年老いたわけでもあるまい」
「充分にいただいております」
　とはいえ、光秀の膳の上は、ほとんど最初の状態と変わっていなかった。信長が話している間は料理に手をつけられるものではない。信長もそれをもちろん分かっている。
「食いながら話をしようじゃないか。なあ、光秀。遠慮は無用だ。だからこの部屋に招いたのだ」
　信長はそう言うとおりに口に物を詰めた状態で言った。
　この信長が食べながら話しをしようと言うなら、それで無礼はない。ここで社交辞令を言う類の人間ではないのだ。むしろ料理に手をつけねば、機嫌を損なう可能性すらある。とはいえ、何かをほおばったまましゃべるのは光秀にとってあまり気持ちのいいことではなく、つまむ程度に手をつけた。
　食事をしながらの些細な談笑が続いた。しかしそれだけのことで光秀を呼んだわけはあるまい。光秀は信長の本意がわからぬまま、ただ話を待っていた。さすがの光秀も少しだけ緊張してきた。それとわからぬように気を引き締めなおし、信長の話を一片たりとも聞き逃さないように注意を向けた。その微妙な空気を読みとったかのように信長は光秀に語りかけた。
「まあ、笑い話と思って聞いてくれ」
　もちろん笑い話などではない。何か突飛な話を始めるが真剣に聞くように、という意味

だ。
「わしは天下を取るだろう。それは自分でも確信している。しかし心配がないわけではない」
　信長はそう言うと手にしていた箸の先を光秀に向けた。
「わし亡き後、天下はどうなる？」
「それはもちろん信忠様が後をお継ぎになります」
「務まるか？」
　片眉を上げながら信長は光秀の顔を覗き込むように見た。
「障害は多いかもしれません」
　光秀は否定も肯定もしなかった。
「ほう、障害とな」
「はい、いろいろとございましょう。一度は殿に従った者も、謀反を起こすかもしれません。殿が天下をお治めになっても、この日本国全てが平らかになるというわけではありません。病巣のようにしこりは残ります。治世が悪ければ、治まっていた病巣も、だんだんとその症状を現しはじめ、いずれは発症し、体を蝕むかのごとく、天下を蝕んでいくこととなります。殿の後を、天下を継ごうというのです。そう簡単に務まるものではありません。本来天下など人の手に余って当然なのですから」
「早い話が天下を統べる器ではないということだな」
　光秀はその問いには答えず、
「先はどうなるかわからないものです。何が幸いするか災いするかわからないところがありますから」
　と言った。光秀から見て、信忠は天下人として信長に遠く及ばなかった。天下を統べるだけの器がないことを否定はしないが、肯定もできかねる、そんなところだった。
「うむ……。光秀の助けがあっても務まらんか？」
　光秀の気持ちが伝わったのか、信長は光秀の答えを否定ととらえた。
「私がいれば何とかなると思いますが」
　光秀は躊躇なく、即答した。
「言い切りおったな。まあおぬしはそういうのが得意だからな」
「ですが、殿亡き後、私がいるという状況はおかしいでしょう。この老体が殿より長生きするのはどう考えてもおかしな話です」
「それはそうだな。結局のところは無理ということか……」
「いえ、必ずしもそうだとは――」
「そのような不確かな賭けはしたくないものだな。それにわしは何があってもうまくいくことはないと思っている。それはわしが天下を取ることと同じくらいに確かなことだ」
「それほどまでに確信がありますか」
「ああ、ある。あれには天下を治めるだけの器量はない。別に無能だと言っているわけではないが、天下は治まらん」
　光秀は答えなかった。
「特にわしのやり方はそこいら中に反感を買っているはずだ。さきほどおぬしの言ったとおりだ。わしがいなくなれば、これ幸いと、火種がいくつ上がるか知れたものではない。

天下統一後の二代目について言えば、統一するのと同様、いや、今回に限って言えば、それ以上の器量が必要になるということだ」
　そこまで言うと信長はくいっと酒をあおった。光秀はすぐに酒をつぐ手を差し出した。
「いや、もうよい」
　信長は光秀の手を下げさせた。
「いや、信忠ばかりを責めることはできんな。わし自身天下統一後にすべきことが見えてこない」
「天下を統一された後は、海を越えた世を平定されるのが殿の本懐ではございませんでしたか」
「それには年をいささか取り過ぎた。この国の天下を取るのにこれほどかかるとは思わなかった。仮に海の向こうの国々と事を構えるとしても、こころざし半ばで命尽き果てるであろう。その後を継がせられる者などおらんわ」
　信長は少しだけ口元をゆがめ、むしりとった魚を口に運んだ。光秀にはその姿が無念そうに見えた。
「異国のことは置いておくとしても、殿には天下統一後の世を正しく導いていただかなくてはなりません」
　光秀は遠慮がちに言った。すると、信長は少し間を置いてからこう答えた。
「わしはな、こう思うのだ。この戦国の世をまとめるには鬼の力が必要だった。強引なまでに世の中を引っ張っていく力がな。だからわしが立った。天下統一を掲げている者はいくらもおるが、奴らには具体的な策がない。その場の戦をいかに勝つかの策は練れても、先が見えておらんのだ。わしに天下統一がかなうほどの力があるかどうかはわからなかったが、天下統一を本気で見据えて策を立てていることでは誰にも引けをとらん。幸いにもある程度の武運にも恵まれて天下統一まであと一歩のところまできた」
　信長は手酌で酒を注ぎ、軽くなめるようにして、口を湿らせた。そしてゆっくりと口を開いた。
「しかしな、太平の世を治める者は鬼であってはならん。その後は民衆を慮っていかねばならん。鬼はある程度世をまとめたところで舞台を下りるのが上策なのだ。天下は人に返すのがよいように思えるのだ」
　信長らしからぬ発言に光秀は驚いた。信長は今まで何をするにも人を頼りにすることなく、自分の力のみで切り拓いてきたのだ。どんなに有能な家臣であろうと自分の命に従って行動させ、自由に行動させることなど決してなかった。にも関わらず、ここへ来て天下を人任せにするようなことを言い出したのはどうしたことであろうか。
　光秀はおそるおそる尋ねた。
「天下をあきらめなさるおつもりですか？」
　信長は光秀の顔を見て、少し笑いを浮かべた。
「そう真剣になるな。笑い話と言っておろう。もちろん天下は統一する。ただわし以外でもそれが可能ではないかと考えてみたのだ」
「信忠様ですか？」
「いや、違う」
　そこで信長は盃をぐっとまた空けると、にやりと笑った。

「猿だ」
　光秀は面食らって叫んだ。
「筑前殿が！？　なぜ！」
「そう興奮するな、光秀。猿は足軽出身だ。民の心というものを一番わかっておる。しかもおぬしが先ほど言ったとおり、才もある」
「それは殿の下にいるからなればこそです！　天下人となるにはあまりにも分不相応です」
「それはあやつが百姓の出だからか？」
「もちろんそれもあります。なにぶん元が足軽ですから、まだまだ軽んじている者も多くあるでしょう。今は認めている者の中からも、筑前殿が天下を取るということになれば、多くの者が反意を抱くに違いありません」
「おぬしもか、光秀」
「私は筑前殿に仕える気は毛頭ありません。天下を治めるには、器量があまりにも乏しい」
「器量と一言に言うが、それをどう見分ける？　何をもって天下を取りうると申すか」
「私がそうと信じた人物のみが天下を取るに足る人物。筑前殿は決してそれ足りえません」
「それではまるでおぬしが天下人を決めてるようだな」
「私が決めているのではありません。私はただ付き従っているのみ。私自身が信じられない者にどうして従っていけましょうか？」
「つまり、猿にはどうあっても従えぬということだな」
「もちろんです」
「わしの命であってもか？」
「恐れながら」
「そうか。わしとしてはあやつは天下を治める器だと思うておる。ただ、おぬしが言うとおり、反発はかなりあるということもわかっておる。ただ光秀がおればどうにかなるかとちょっと思ったのだ」
　光秀がいればどうにかなる、主人にそう言われるのは家臣冥利に尽きる。とはいえ、秀吉に仕えるなどというのは冗談ではない。光秀は信長だから仕えているのだ。信長がいなければ、自分が天下を目指していただろう。
　そもそも、秀吉は天下人としては品がなさすぎる。日の本をしょって立つ人間には能力以外にも品格が必要だ。いや、品格を含めて器だと言ってよい。大体、戦に関しても兵糧攻めやら水攻めやら、華がない。決して兵糧攻めや水攻めが悪いと言っているのではない。それが極めて有効な手段なのは秀吉が実証していて、疑いようがない。しかし天下を取るにはそのような地味な戦だけをしていては駄目なのだ。ある種、民衆の伝説となるような神々しい勝利がなくてはならない。
　つまりいろいろと理由を挙げ連ねてみたものの、早い話が気に食わないのだ。
　しかし。
　光秀はやはりいつもの通り考えてしまうのだ。いかにすれば秀吉が誰にも文句を言わせずに天下を取ることができるかを。秀吉が嫌いでもこれは癖なのでどうしようもない。案

外信長はそのことも計算に入れて話をしたのかもしれない。いや、信長のことだ。きっとそうに違いない。
　まず、信長が跡目を秀吉に継がせる、このことについて考えてみる。その場合、信長の命なら他の武将も納得せざるを得ない。多少の不平不満については信長が秀吉の上から目を光らせていればいいのだ。いや、それでは意味がない。それでは信長が上皇となるようなもので、事実上の天下は彼が治めているのと変わりがない。彼が引くと言っている以上、もはや何もやらないに違いない。その場合の反秀吉勢力は、柴田勝家、毛利元就、上杉景勝、徳川家康か。そして殿の実子である長男信忠、次男信雄、三男信孝を忘れてはならない。彼らは殿の命だとしても秀吉が後を継ぐことを納得するはずがない。特に信忠はそうだろう。勝家は確実にそこに乗ってくる。秀吉としては信雄か信孝を担ぎ上げたいところだが、既に秀吉が跡目を継いでいる以上、秀吉につく理由がない。二人ともむしろ信忠につくのが自然だ。そうなると秀吉は毛利、上杉、徳川、とくに徳川と友好関係を築こうと画策するだろう。しかし徳川もそれには乗らない。彼も野望の人だからだ。彼は終始天下の動向を窺っている。秀吉について天下を窺うより、信忠に恩を売り、その傍らで権を手にして、そのまま乗っ取る、それが徳川のやり方だ。
　毛利、上杉についてははっきりしないが、大勢に影響はない。秀吉にはそれよりももっとやっかいな敵がいるからだ。高山右近、筒井順景、彼らを擁した、そう光秀自身が当然秀吉を潰す。
　悪くすれば、一度治まりかけたこの世が混沌の戦乱の渦へまた巻き込まれることになる。
　それは信長の望んでいることとはまるで違う。また、鬼が出て来なくてはならなくなる。信長の指名ではうまくいかない。
　現在の状況を考えてみる。信長配下の武将はみな各地へ凱旋していて、この京には自分を含めて数少ない武将しかいない。これはある意味、天下取りの機会と言えなくもないか。つまり信長を倒して天下を奪うということだ。信長が家臣に油断して足元をすくわれるというのは考えにくいが、普通に信長を倒す武将がいるとはもっと思えない。今この状況は天下取りに最も近い状況なんじゃないだろうか。
　ここで秀吉が中国から急いで戻ってくる。そして信長を一気に攻めたてて天下を奪う。これは信長が跡目を指名するより悪い。その場合は秀吉は謀反人だ。はるかに反秀吉勢力は膨れ上がる。いや、そこで秀吉に同調する者が出るとは考えにくい。そもそも毛利を倒しもせずに戻ってくるのは、いかにも無理がある。信長にはそれを訝る時間がある。万が一うまくいったとしても、謀反人である秀吉を倒したものにこそ、天下統一の大義名分が与えられそうだ。
　光秀はここでなるほど、と思った。謀反人を討てば天下統一の大義名分が与えられる。つまり、謀反人が秀吉とは別人で、秀吉がその謀反人を討てば天下人になれるという計算になる。
　この考えは悪くないように思えた。
「笑い話として聞いてください。例えばですね、今、殿の配下の武将は、ことごとく各地に分散しています」
「おぬしを除けばな」

「はい。そうとしましても、こういったことは滅多にないでしょう。そこである者が天下の誘惑にかられて殿のお命を奪ったといたしましょう」
「ほう」
「それを耳にしていち早く駆けつけた筑前殿が殿の無念を晴らす、そうすれば筑前殿の天下にも可能性が出てきましょう」
「確かに無難なところかもしれんな。しかし信忠はどうする？　わしの弔い合戦に遅刻するほどの腑抜けではないぞ」
　確かに信忠はいち早く駆けつけてくるに違いない。そうすれば、いかに秀吉の軍が大勢を占めようとも、大将は信忠ということになってしまう。それによって次の天下人となるのは間違いなく信忠だ。
「では信忠殿のお命も一緒に奪われることとしましょう」
　信忠が駆けつけてこないためには信忠がいなければいいのだ。
「信忠だけではなかろう。信雄や信孝もいる。それもすべて一つ所に集めて皆殺しというのはあまり現実的ではないように思うが」
「信雄殿は申し訳ありませんが人望が厚いとは言いかねます。筑前殿の軍勢が最も大きければ、信雄殿は大将ということにはならないでしょう。跡目を継ぐという点に関しましてもあまり積極的に支持されるとは考えにくいです」
「そうだろうな。あやつこそ本当の腑抜けだからな」
　信雄は過去の失態により、一時期信長に勘当を申し渡されたほどに、信用を失っていた。もちろんこの時代の大名、武将は生き残るためにより優れた武将につこうと目を光らせている。実の息子でありながら信長に勘当された信雄は、戦国という時代で敗北の烙印を押されたのに等しかった。そのような事情から周りの諸将からも軽く見られていた。
「信孝殿は信雄殿より人望はありますが、なにぶん人がよいところがあります。信雄殿を差し置いて自分が弔い合戦の大将になるほど、肝が据わってはいないように思えます」
「それももっともな意見だな」
　信孝に関してはそこそこ見どころがあると信長は考えているようだが、それでも天下を取るほどのずうずうしさがないのは信長にとっても納得できることだろう。
「あと問題としては、謀反人を討つのが他の誰でもなく、筑前殿でなくてはいけないということです。それに関しては、誰よりも早く謀反を知らせることができればよいわけですから、方法はいくらもありましょう。例えば――」
「いや、それは大した問題ではあるまい。おぬしがやろうと思えばできることはわかっておる。それよりもむしろ、謀反人が誰かということの方がよほど重要な問題だと思うが」
「それについては全く考えていません。ですから笑い話だと申しました。私が四国へ向けて出発したときを見計らって、機敏に行動でき、しかもそれなりに軍勢を手にしているとなると」
　光秀は考えた。該当者はいない。
「やはりこの考えには無理がありそうです」
　ところが信長はにやりと笑って光秀を上目遣いで見た。
「いるではないか。これ以上はないぐらいに適当な人材が」
　やはりすぐには思い当たらなかったが、信長のその笑い顔を見て、はた、と気づいた。

確かにそれをやり遂げることのできる位置に一人だけ人材がいる。光秀が四国へ向けて出発するのを待たなくてもよく、機敏に行動ができ、それなりに軍勢を手にしている武将が。そう、それは光秀自身だった。
「気づいたか？」
　光秀が思い当たったことが見てとれたのだろう。信長はいたずらに成功した子どものように楽しげだった。
「確かに状況的には可能だと思いますが、間違ってもそのようなことにはなりません。殿への反逆の意志は全くないのですから」
「わしが納得していたとしてもか」
「ありえません」
「そうか」
「はい」
　それからしばらく二人は黙ったまま食事を続けた。
　信長は最後に盃をくいっとあおると急に立ち上がった。
「わしはこれから少しばかり用があるから先に失礼する。光秀はゆっくりやっていってくれ」
「では私もそろそろ失礼いたします」
「そうか」
　信長はそれだけ言うとそのまま向きを変え、部屋のふすまに手をかけた。そしてそこで動きを止めた。
「光秀、わしは六月の初日に本能寺で茶会を開くことにしよう。そしてその夜はそのまま本能寺へ泊まることにする」
　それはあきらかに光秀を誘っている言葉だった。さっきの笑い話を実現しろと。
「私はやりませんよ」
　光秀は答えた。
「ついでに信忠もその茶会に呼び寄せて、妙覚寺あたりに泊まらせることにしようと思うが、光秀はどう思う」
「私はやりませんよ」
　光秀は繰り返した。
「いいや、おぬしはやるよ。わしの希望におぬしは今までよく応えてきた。それになにより」
　絶対にあの不敵な笑いを浮かべているに違いなかった。背中ごしでも間違いない。一見自分とは似ても似つかぬ信長だが、その内面はよくわかる。心の中では似たところがあると、光秀はつねづね思っていた。
「おぬしはこういうのが好きではないか。わしにはよくわかる。おぬしは気づいておらんかもしれんが、わしとおぬしは中身がよく似ておるよ」
　信長は最後にそう言い残してその場を去った。
　光秀はその場を動けずにいた。そしてだんだんと自分の顔が苦笑いで歪んでくるのを感じていた。

天正１０年（１５８２年）６月１日、明智光秀は本能寺の織田信長を攻めた。本能寺の信長はそれを慌てて伝えに部屋に来た家臣に「是非に及ばず」と言ったそうである。その家臣には意味がわからなかっただろう、その言葉も光秀が聞けば、こう聞こえたはずだ。
「当然だよ、なぁ光秀」
その不敵な勝ち誇った笑い顔に、慌てていた家臣が気づくことはなかった。

―了―